

厚物レベラー探訪／村山鋼材

全国屈指の設備操る卓越した技術

ハイテン対応強化や協業深化で前進

全国でも屈指の高性能レベラーを持つ村山鋼材（本社・千葉県浦安市、村山和雄社長）は、他の追随を許さぬレベラー操業技術や多様なサイズ・鋼種の対応力を誇っている。浦安工場にあるJCL（ジャンボカッティングライン）1は世界最大級というレベラーラインで、高炉メーカーの下工程ラインを手本とした技術力は群を抜く。月間約1万トンの加工を手掛けることができ、コイルセンターとしては日本で初めてとするサイズの加工を可能としている。まさに「厚物レベラーの雄」といえる存在で、顧客や協業先とともに成長の歩みを続ける。

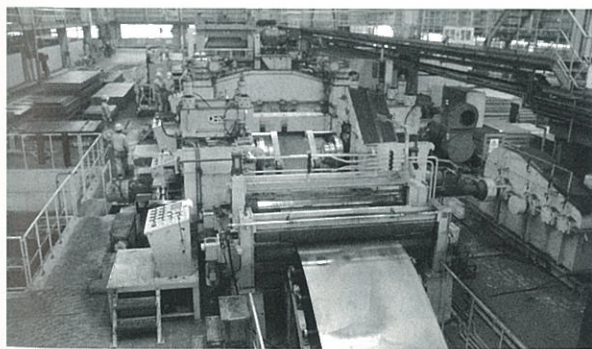
高炉の生産ライン技術を注入 操業ノウハウは「職人芸」

「ジャンボ」とも呼ばれるJCL1は1974年に先代の文雄氏が当時の新日本製鉄君津製鉄所のレベラーラインを参考にし、機械メーカーに特注で旧東京工場に設置した。君津製鉄所からの転籍者などが繊細な操業技術を現場に伝え、高品質な鋼板を加工している。



村山社長

村山社長は「板厚19ミ、板幅2300ミ、板長12300ミ」まで対応可能で他社では加工できない広幅、長尺物に対応できる場所が強み」と語る。最近では好評を博すレーザー切断用鋼板の対応力を上げ、鋼板から残留応力を除去する仕組みを確立した。これにより、平坦度要求の厳しい顧客の満足度を高めている。レーザー切断加工後の反りを抑え、極薄のスケールのため表面品質は厚板ミル製品にも劣らないという。塗装後の光沢も優れ、顧客工程での次工程の加工効率改善、コストダウンにつながる。



村山鋼材の技術の粋を集めたJCL-1

はリーマンショックだった。浦安への機能集約による効率化や旧東京工場の周辺環境の変化に対する施策として03年頃から移設を検討していたが、リーマン直前期までは好景気が続き、移設を決断できなかった。

リーマンの影響で当時の売上・利益は大きな痛手を受けたが、村山社長は「移設のタイミングは非常に難しかった。リーマンがなければ村山鋼材の現場の合理化はなかった」と振り返る。品質の維持・向上のため、12年にフィニッシュレベラーをリニューアル、14年にはリーフレベラーのロールを交換した。薄板についてはリーマン後に工場を閉鎖し、外注加工に切り替えてスリム化を果した。

日当たり約500トンを加工を継続 高収益企業に向けて邁進

直近の1日当たりの加工量は約530トと非常に高水準だ。ひも付き、店売りではひも付きの方が比較的好調だが、5月には日当たり加工量が535トと過去最高を記録するなど、ほぼフル稼働状態となっている。最近では毎日2時間の残業で対応し、足元では建機関連の引き合いがよく来ているそうだ。



浦安第一工場の外観

今後の需要環境は決して楽観視できない状況だが、「品質（クオリティ）」「創造（クリエイション）」「成長（サステイナビリティ）」という3つの柱を経営理念に掲げ、加工技術向上に取り組み、より良い成果を出そうとしている。会社全体で17年9月期の目標は売上高116億円、販売数量は25万3千トと設定し、6月時点で目標以上のペースできている。ここ数年間としては、良い決算を期待できそうだ。年間加工量は19万8千トを見込む。ここ数カ月は月間加工が1万6500ト、販売が2万1千ト程度で推移している。デバリでは今年1月から、1日計

約2千トに及ぶコイル・鋼板の出入荷をスムーズに行うため、入出荷を午前6時から行っている。これにより、ドライバーの待機時間も短縮できる。

村山社長は関東コイルセンター工業会の会長を6年間務めた。その後一時期、立教大学の大学院で現代企業の危機管理やCSR（企業の社会的責任）についてあらためて学び、経営者としてさらなる成長を遂げ、経営に活かしている。営業やレベラーなどの操業手法で、いつまでも売上げ至上主義ではいけないと感じている。「どうしても量で稼ござるを得ない面はあるが、売上・量を追うだけではブラック企業になってしまう。そうならないために、まずは日々できることを積み上げていきたい」と展望する。

藤澤鋼板との協業さらに深化 現場レベルでも活発に

先代から長年の付き合いがある大手コイルセンター・藤澤鋼板（本社・千葉県浦安市、藤澤鐵雄社長）とは約5年間協業関係にあり、従来の村山鋼材が板厚6ミ以上、藤澤鋼板が1.6ミ～6ミの鋼板を加工するという棲み分けに加え、生産部門と厚

板営業部門での交流も盛んになりつつある。近頃は藤澤鋼板の工場の短尺ハッカーを参考にし、パイラー上げ、鋼板出荷の作業効率改善につながるとして、新たなハッカーを導入する方向で検討している。2社の設備をより有機的に活用し、合理化を推し進められたことには大きな意味がある。JCL-1を筆頭とした村山鋼材の揺るぎなき技術力をまだまだ磨いていく方向だ。村山社長は「販路拡大を続け、顧客とともに歩んで持続的な発展を目指していくことが肝要」と力を込めた。

（本誌記者 齊藤太一）



適応鋼材の拡大などを図りつつ順調な稼働を続ける